

資料紹介…碓井福太郎『鹿児島征討日記』

—西南戦争に従軍した政府軍兵士の日記—

大谷 正

一、はじめに

本稿は筆者が古書店より入手した西南戦争従軍日記「碓井福太郎『鹿児島征討日記』」を資料紹介するものである。

『鹿児島征討日記』の体裁は、縦二十四、五センチ、横十六、五センチ、表紙には「鹿児島征討日記 碓井福太郎」とあり、裏表紙は「甲辰天保拾五年二月下旬 算法秘用記」としるされた古紙を再利用している。中身は序文一丁と本文が六十三丁で合計六十四丁、本文の後に西南戦争に功績を挙げた熊本鎮台所属谷村計介伍長の功を称えて建立された、「軍人亀鑑」碑建立に関する資料が付録として四枚付されている。本文は十行青罫紙と罫のない半紙が混用される。罫紙には耳の部分に「神奈川県下」と印刷されたものと、印刷がないものの両方がある。

日記の冒頭には、筆者の碓井福太郎が新聞の雑報等から情報を集めて、西南戦争の開戦原因から三月中旬迄を再

構成した部分があるが（本文十六丁目の半ば過ぎまで）、本稿では紙幅の関係でこれを割愛し、碓井が召集される
ところから後、つまり碓井自身の戦場体験を記した部分のみを紹介し、雑誌の原稿枚数制限があるので、二回に分
けて掲載する。すなわち本号には、碓井福太郎が召集され郷里を立つ三月一日から五月三十一日までの間の日記を紹
介し、次号には六月一日から彼が帰京後、召集を解かれて帰宅する一月七日までの日記を紹介する。以下、資料
紹介する上での凡例を記す。

日記の本文中には細字二行で記した割注が多用されている。翻刻にあたっては割注を括弧に入れ、つぎの様に表
した。左記例文の〔晴天〕と〔松崎ヨリ十里余〕が割注である。

十六日〔晴天〕（中略）同五時三十分原ノ町へ着軍一伯ス〔松崎ヨリ十里余〕

本文中の旧字体は原則として新字体に改めた。

原文には句読点も改行も一切ないが、読みやすさを考えて、読点を施し、日毎に改行をした。

誤字・当て字と思われるものが多かったが、原則として訂正せずそのまま残した。例えば、碓井は「陣」を「陳」
と誤って崩し、自分たちの大隊長の大島少佐を「大島少佐」と記しているが、これらは正字に訂正せず、（ママ）
のルビを振った。

虫食いや判読不能なものは□とした。明らかな誤りや意味不明な箇所には（ママ）のルビを振り、必要に応じ
て一部（ ）で修正した箇所がある。

抹消部分は、塗りつぶしたものは■で表し、訂正線で消してもとの語句が分かるものについては、訂正線を一本
施した。

地名・人名については、理解を助けるために可能な範囲で注記を施した。調べるために使用した典拠は煩雑にな

るのでいちいち注記していないが、『国史大辞典』（吉川弘文館）、参謀本部編『明治十年征討軍団記事』、参謀本部陸軍部編纂課編『征西戦記稿』、『日本歴史地名大系』（平凡社）の熊本県・宮崎県・鹿児島県の巻、『県別マップル43・熊本県道路地図』・『県別マップル45・宮崎県道路地図』（ともに昭文社、二〇〇九年）を主に用いた。字名、小字名についてはインターネットで検索した場合もあるが、土地勘がないために不明な箇所も残った。

二、西南戦争研究史

言うまでもなく西南戦争とは、一八七七（明治一〇）年の二月より九月までの七ヶ月間余の期間、九州地域、とくに熊本県、大分県、宮崎県、鹿児島県を舞台として、私学校党を中心とする薩摩軍とそれに協力する各地の党薩隊が、政府軍と戦いを交え、双方に多大な犠牲を出した激戦の末に薩摩軍が敗北した、近代日本最後の内戦である。西南戦争に関しては近年、小川原正道『西南戦争—西郷隆盛と日本最後の内戦』（中公新書、二〇〇七年）と猪飼隆明『西南戦争—戦争の大義と動員される民衆』（吉川弘文館、二〇〇八年）の二冊の力作が刊行されて、最新の研究水準を知ることが可能となった。なにしろ「西南戦争」と銘打って、歴史研究者が著した研究書、単著が刊行されたのは、半世紀以上も前の、圭室諦成『西南戦争』（至文堂、一九五八年）が最後であるから、それ以後の研究と資料発掘の進展については、小川原・猪飼両氏の著書を読み、とりわけ巻末の参考文献一覧と資料一覧を凝視することで理解できるようになったのである。

本稿において碓井福太郎『鹿児島征討日記』を復刻して紹介する前に、西南戦争の研究史・資料史を簡潔に紹介し、そのなかで西南戦争の歴史的な位置づけがどのように変化してきたのかを検討したい。

西南戦争に関して政府側が刊行した最初の文献が、『明治十年征討軍団記事』（参謀本部編、一八八〇年）である。

その凡例に、「此編ハ薩賊ノ謀反ノ濫觴ヨリ其平定ニ至ルマデノ要領、即チ軍団本営ヨリ指揮セル部署方略及ヒ交戦ノ梗概ヲ記シ、以テ征戦記編纂ノ大綱ト為ス者ナレハ専ラ簡明ヲ主トス」とあるように、『征討軍団記事』はこれの後に予定されていた「鹿児島賊徒征討戦記」、つまり本格的戦史作成のための綱要と位置づけられた。この後、陸軍と海軍からそれぞれ、『征西戦記稿』（参謀本部陸軍部編纂課編、陸軍文庫、一八八七年五月、六五巻および付録）と『明治十年西南征討志』（海軍省編、一八八五年九月、全四冊）が刊行された。これらの著作は、陸軍と海軍の公式戦史というべき大部なもので、政府軍を官軍、薩摩軍・党薩諸隊を賊軍と称し、政府の立場を代弁している。もちろんこれらの陸軍・海軍の公式戦史を作成する資料として、現在防衛省防衛研修所戦史部図書館に所蔵されている西南戦争関係資料（陸軍大日記に含まれる、膨大な量の当時の原資料や各旅団・大隊・中隊の記録）があったことは言うまでもない。

各旅団単位の西南戦争戦闘記録が陸軍大日記中に含まれているが（例えば「出征第一旅団戦記」など）、毛筆で書かれた未定稿である。安藤定編『別働第二旅団戦記』（発行所不明、一八八七年、全八巻、四分冊）と別働第三旅団参謀部編『西南戦闘日注』（畏三堂、一八八七年、上下巻付録で八〇〇頁を超える、別働第三旅団は警視隊で編成）が刊行されたのは例外的な事例である。

政府軍側の西南戦史刊行に対抗するように、薩摩軍と党薩隊に共感する立場からの西南戦争研究として、明治も末年に『西南記伝』（黒竜会編、黒竜会本部出版、一九〇九年〜一九一一年）が出版された。全六冊という大冊である。黒龍会の創設者である内田良平の肝いりで、一九一〇年の韓国併合との関連を意識しつつ刊行された。その内容は、彼らが理想とし、主張したが、日本政府側の「日韓併合」によって挫折した「日韓合邦」論の起源と正統性を西郷隆盛に求めるという主張を展開したものである。西郷をはじめとする在野の志士の進取主義と有司専制の

藩閥政府側の退嬰主義とが対立した第一段階の「征韓論争」・明治六年政変と、第二段階の「土族反乱」とそれらが西南戦争に至る過程を、これらの政治運動に参加した在野の志士たちの行動に焦点を当てながら描こうとしたもので、それ故に書名が「記伝」となっている。ただし『西南記伝』の実質的著者である川崎三郎（号は紫山）は、すでに『征西戦記稿』が刊行された直後の一八八八年に、博文館の依頼を受けて『西南戦史』全一二巻を執筆刊行した。水戸出身の川崎は、「進取」と「退嬰」とを対比して政治過程を描くアイデアを、水戸の先輩である著名な会沢安（正志齋）の著作『新論』に借り、この構図にしたがって彼の西南戦史を叙述した。博文館版『西南戦史』にはすでに『西南記伝』の基本的な構図が表れているが、これを『西南記伝』にまで拡大していくためには、膨大な資料調査のための時間と内田良平につながる人脈へのインタビュや協力依頼が必要であったとおもわれる。川崎自身も「日韓合邦」運動の渦中で活動し、一進会の一九〇九年の「韓日合邦建議書」の起草にも参加している。¹¹⁾

このように政府側とそれに対抗する側の西南戦争史が明治期に登場し、しかもそのどちらもが、明確にそれぞれの党派的立場に立ちながらも、豊富な資料を閲覧・利用し、かつ叙述に使用する資料選択も的確であったので、『征西戦記稿』・『明治十年西南征討志』・『西南記伝』の示す西南戦争像が、それぞれが矛盾するところがあるにも拘わらず、長く人々の西南戦争理解を規定してきた。

このような状態は日本のアジア・太平洋戦争敗戦と朝鮮の独立、そして大日本帝国憲法体制から日本国憲法体制への転換を契機として変化し、西南戦争は戦前と違った文脈の中で語られるようになった。明治維新研究のリーダーであった遠山茂樹は『明治維新』（岩波全書、一九五一年、その後岩波書店の同時代ライブラリー、岩波現代文庫に収録）の中で、西南戦争を明治維新の終わり、土族反乱・土族民権から豪農民権への転換点として再評価した。この観点は定説化して各種の辞書で、この観点から西南戦争が説明されるようになった。

もう一つの大きな変化は、地域資料の発掘によって西南戦争と地域という論点が登場したことである。先に紹介した圭室諦成の著書は戦場となった熊本地域の資料を発掘し、地域と西南戦争という観点を先取りしたものであった。やや時代は下るが、『鹿児島県史料・西南戦争』全四巻（鹿児島県歴史資料センター黎明館、一九七八年から一九八〇年に三冊発行、第四冊は二〇年後の二〇〇〇年発行）は西南戦争に関する中央と地域の資料を収集・編集し、その後の研究の基礎となった。

最近の小川原正道と猪飼隆明の著作は、以上のような戦後の研究状況をふまえながら、さらに徹底的に中央と地域の資料を博搜している。このような地道で時間を要する資料調査を背景にして、小川原は従来よりさらに具体的に西南戦争の全過程を叙述し、猪飼は熊本地域の民衆の西南戦争体験を豊かな地域資料で描くと共に、中央の資料への目配りも見事な作品を著した。

近年の資料発掘の特徴の一つは、戦争を体験した個人の日記のレベルまで調査を進め、読み解くことによって、戦争の実相と人々の戦場体験を明らかにしようとするもので、そのために戦争に参加した兵士達の戦場体験がわかる手紙や日記の復刻、資料紹介が相継いでいる。

従軍日誌の復刻・紹介例は薩摩軍・党薩隊関係者の日記が比較的多い。前記『鹿児島県史料・西南戦争』や西郷南洲顕彰会が発行する『敬天愛人』に興味深い薩摩軍・党薩隊関係者の従軍日記が掲載されている。熊本隊関係では、古閑俊雄『戦袍日記』と佐々友房『戦袍日記』が熊本の地元出版社から復刻されており（青潮社、それぞれ一九八六年と一九八七年復刻）、また甲斐利雄編纂・猪飼隆明監修・解題によって安藤経俊日記が『一神官の西南戦争従軍記―熊本隊士安藤経俊「戦争概略晴雨日誌」』（熊本出版文化会館、二〇〇七年）として刊行された。

薩摩軍・党薩隊の従軍日誌に比べると政府軍側の従軍日誌は数が少ない。戦争の翌年に、政府軍第一旅団会計部

長川口武定の『征従日記』が、第一旅団長であった陸軍少将野津鎮雄の序文を得て刊行された。この日記の特徴は第一旅団のみならず、政府軍全般の兵站補給に関する貴重な情報を提供していることで、一方で丁寧なスケッチが多数収められており、戦場の実相を知ることのできる貴重な資料である。一九七八年に熊本市教育委員会が、一八八八年には熊本の地元出版社青潮社が復刻している。その他、一九三一年には陸軍少将亀岡泰辰による『西南戦袍誌』が陸軍将校の親睦団体である偕行社から出版された。亀岡は西南戦争当時は陸軍少尉で、第三旅団参謀部のスタッフ（伝令使）として従軍した折の日誌である。政府軍兵士の日誌としては、元川越藩士で警視庁巡査であった喜多平四郎の従軍日記が、佐々木克監修・喜多平四郎著『征西従軍日誌—一巡査の西南戦争』（講談社学術文庫、二〇〇一年）として出版されており、喜多の日記は熊本城籠城から鹿児島・宮崎への転戦を記録したユニークな資料である。

本号で紹介する碓井福太郎『鹿児島征討日記』は、第一旅団に所属した一般兵士の従軍日記で、田原坂の戦闘から最後の城山の戦闘までを、実戦に参加した兵士の視点から描いているという意味で、紹介すべきの価値があると思う。

三、『鹿児島征討日記』に見える碓井福太郎転戦の行程と戦場体験

碓井福太郎は後備兵であり、西南戦争発生とともに召集された。彼の階級は明記されていないが、日記の記述から兵卒ではなく、下士官の伍長であったと思われる。後備兵召集を受けて、一八七七年三月一日郷里（不明）を立ち、三月四日東京麻布の東京鎮台歩兵第一聯隊営所に到着した。三月十日同営所を出発し、新橋・横浜間は鉄道で、横浜よりは「飛脚船東京丸」に乗船、途中で神戸と下関に寄港して、三月一四日に筑前博多港に到着した。

碓井の所屬部隊は、東京鎮台歩兵第一聯隊第一大隊第三中隊であった。この部隊は一五日博多を發ち、徒步行軍して一七日の夕刻高瀬駅（現在熊本県玉名市高瀬）に到着した。高瀬から先が戦地で、激戦のつづいていた田原坂に至近の地であった。しかし、碓井は足を痛めて遅れ、高瀬駅を経て所屬部隊の待つ田原坂至近の木葉駅に到着したのは、一九日午後四時であった。翌日三月二〇日の早朝から始まった戦闘で政府軍は田原坂を占領し、植木まで進出したが、碓井は到着早々この激戦に参加することになった。

碓井が戦場に到着するまで状況と、到着後の田原坂の戦闘から城山陥落までの戦況を、前記の小川原『西南戦争』と『征討軍団記事』および碓井『鹿児島征討日記』の叙述にしたがって要約すると次のようになる。

薩摩軍は二月一四日、私学校前の旧練兵場で閱兵式を行い、前衛部隊の別府晋介の率いる六番・七番連合大隊が加治木から大口方面に出發した。翌日一五日から漸次本隊が鹿児島を發つて熊本に向かい、二一日に薩摩軍が熊本城下に進入し、戦闘が始まった。

熊本鎮台側は、兵力が弱体で、かつ前年の神風連事件で熊本城を攻撃された経験から、徴兵された農民主体の兵士に信頼がもてなかつたこともあり、野戦をさけて籠城戦を選び、四月一四日に背面軍が熊本城との連絡を成功させるまで、約二ヶ月におよぶ籠城戦をつづけた。熊本鎮台は福岡と小倉に分営があり、そこに駐屯していた歩兵第十四聯隊（指揮官乃木希典少佐）に熊本城に入城することを命じたが、第一大隊左半大隊以外は入城できず、歩兵第十四聯隊は二月二日に熊本城北方の植木（鹿本郡植木町）で薩摩軍と戦闘に入ったが、この後高瀬まで撤退した。第十四聯隊の聯隊旗が薩摩軍に奪われたのはこの日である。

二月一九日、鹿児島賊徒征討の詔が發せられ、有栖川宮熾仁親王を征討都督に、山県有朋・川村純義両中將を參軍に、野津鎮雄少將を第一旅団司令官に、三好重臣少將を第二旅団司令官に任じ、總督本營を大阪に置くこととな

った。さらに二月二五日には三浦梧楼少将を第三旅団長に、二七日には大山巖少将を別働隊司令官に任じた。

これらの第一旅団、第二旅団、第三旅団および別働隊は、二月二五日に高瀬ではじまった戦闘につづいて、吉次越、田原坂、山鹿口方面で薩摩軍と激戦をつづけ、多くの死傷者をだした。政府軍は増強を余儀なくされ、三月四日には新たに増強された部隊を第四旅団として編成し、これを軍団直轄として田原坂、吉次越の戦線に配置し、また別働隊を解隊して、第一から第四までの各旅団に編入した。そのため、碓井の所属部隊である東京鎮台歩兵第一聯隊第一大隊第三中隊は第四旅団に編入されたのである。

三月二〇日の激戦では政府軍は田原坂を攻略した後、植木を占領し、さらに熊本城をめざして南下し向坂に至ったが、ここで薩摩軍の伏兵に攻撃され多くの死者を出して植木まで退却した。その後、両軍の睨み合いがつづき、碓井の部隊は植木周辺を移動しながら堡壘を構築して、小規模な戦闘をつづけた。熊本南方の八代に上陸した黒田清隆の指揮する背面軍（衝背軍）が、四月一四日に熊本城との連絡を成功させると、翌日の四月一五日、薩摩軍は一斉に退却をはじめた。この時、休憩中だった碓井は友人の古屋房吉と滞陣中の鬼塚の陣地に近い岩野山に登り、両軍の陣地を遠望していたが、薩摩軍の陣地から一斉に火の手が上がるのを見て薩摩軍の攻撃かと思いき急ぎ帰陣すると、薩摩軍退却の知らせが届き、直ちに「賊ノ巢窟ニ火放チ連陳ノ俣喇叭ヲ鳴ラシ喊声ヲアケテ田畑道路ノ差別なく一時二城下押寄せ、午後四時頃熊本城下出町に至り籠城していた熊本鎮台兵士と出会った。

この後、碓井達は薩摩軍が陣を敷いていた保田窪、木山を攻撃する作戦に参加し、四月下旬に木山（熊本県上益城郡益城町木山）を占領した。木山に滞陣していた五月はじめ、東京鎮台歩兵第一聯隊は第一旅団に編入され、以後終戦まで所属は変わらなかった。この時、五月九日付の第一旅団の編制は表1の通りである。第一旅団の総員は二七七四名、碓井の所属する第一聯隊第一大隊第三中隊は、将校五名、下士官二七名、兵卒一二七名、合計一五九

表1 5月10日の第1旅団の構成
 (『征西戦記稿』巻30「編成改良」15~16頁)

總計將校以下二千七百七十四人	臺		鐵	臺	鐵	鐵	臺	鐵	臺	鐵	鐵	同	衛	近	本管
	工兵第一去隊	騎兵	豫備第一去隊	九	十二	三	八二	一	三	一	二	二	二	二	聯隊
	大塚中尉	阿部大尉	瀬崎大尉	鈴木少佐	川崎少佐	川崎少佐	追田少佐	追田少佐	長谷川中佐	大島少佐	比志島少佐	國司中佐	司合官	大隊	
	第二中隊	半小隊	四分隊	二	一	四	三	二	合二	合二	合二	合二	合二	中隊	
	四	一	一〇	六	八	五	五	三	五	四	一	二	三	將校	
	二二	二	二五	三八	三五	二二	二二	二二	五	五	二	二	三	下士	
	八六	一一	一一二	一一五	一四〇	一七	一三	一三	一〇	二七	二七	二七	二七	卒	
	上牟田村	神水村	砂取村	上江津村	神水村	上寺中村	寺中村	灰塚村	同	沼山津村	屯駐所				

十日第一旅團ノ現員五ノ如ク日五朔月登九

名であつた。開戦以来、第三中隊の中隊長は斎藤時之大尉であつたが、この直後に第二旅団の第二聯隊第一大隊第一中隊に移動し、後任に木下大尉（忠信？）が赴任した。

第一旅団は御船、堅志田、浜町を熊本鎮台兵と協力して防衛していたが、五月下旬から熊本・宮崎県境の馬見原、そして宮崎県の三田井（宮崎県西臼杵郡高千穂町三田井、高千穂町役場付近）を攻略する作戦に参加した。碓井も、五月二十七日に馬見原に入り、熊本・宮崎県境の鏡山を越えて、六月一日には三田井に入った。馬見原、三田井は現在では交通不便な山岳地帯で、九州の屋根、辺境のイメージがあるが、当時は熊本と延岡を結ぶ日向往還の要衝で、地域の商業の中心地であつた。碓井達が進んだ、御船、浜町、馬見原、三田井には当時多くの酒造蔵があつたという。

三田井を占領した後、第一旅団は五ヶ瀬川に沿つて延岡方面に進出したが、この地域は「道路險難」

で、周囲も急峻な山岳地帯のため攻撃は停滞し、両軍とも尾根筋に堡塁を構築して、銃撃を交わした。六月下旬、豊後口（大分県南部）の重岡を政府軍が落として延岡に圧力をかけると、第一旅団も五ヶ瀬川中流の中村、大楠（宮城県西白杵郡日之影町）を攻撃する計画を立て、六月二五日早朝から攻撃を開始したが、薩摩軍は地形を利用して抵抗をつづけた。七月二日、政府軍は大楠村を占領したが、攻勢はここまでで、これ以後、八月上旬まで第一旅団は現在の日之影町と延岡市の境界あたりで、約一ヶ月間の滞陣をつづけることになる。七月三一日早朝、薩摩軍は第一旅団の陣地に最後の攻勢をかけてきたが、碓井たちはかろうじてこれを押し返している。

八月九日、第一旅団は薩摩軍の固守していた大山・荒平の堡塁を攻撃し占領した。この後、政府軍は一斉に薩摩軍が本拠を置いていた延岡を攻撃した。碓井もこの攻撃に参加した。支えきれず薩摩軍は延岡を放棄した。八月四日のことである。翌日一五日の延岡北方の和田越の戦闘で最終的に薩摩軍は敗れ去り、生き残った薩摩軍は西郷の宿陣に集結して軍議を開き、一七日の軍議では西郷の提案で、政府軍の包囲を破って三田井に進出し、そこから方向を決めることとなり、西郷は解軍宣言を出した。八月一二日から一七日にかけて、行動をともししていた佐土原隊、高鍋隊、飢肥隊、熊本隊、協同隊、竜口隊などの党薩諸隊が政府軍に投降した。薩摩軍は一七日夜、第一旅団と第二旅団の守備兵が守っていた可愛岳（えのだけ）を突破して重囲を脱した。以後、三田井の第一旅団運輸出張所で大量の糧食、武器弾薬、現金を手に入れ、鹿兒島方面に宮崎と熊本県境の急峻な山岳地帯を駆け下り、九月一日には鹿兒島に入った。

碓井の日記には、現地での体験と後から知った情報を交えて、西郷たちの脱出行を詳しく描いている。この後、息つく暇もなく第一旅団は西郷たちの追撃に移り、風の様に走り去る西郷たちの跡を追って宮崎と熊本県境の急峻な山岳地帯を急行軍した。碓井の日記は西郷たちの逃走の様子をつぎの様に記している。「軍ヲ三備トナシ、先軍ノ

將逸見^(マユ)十朗太、中軍將西郷隆盛、後軍將桐野利秋、各三四里離レテ行軍ス、先軍休憩シ、其内半員ハ睡眠セス、暫シテ中軍至リ、先軍起シテ之ヲ走ラシム、中軍又休憩シ、亦後軍至テ中軍ヲ起シ之ヲ走ラシム、後休息シ、皆刀ヲ鞘ニ修ムルコトナク、斯ノノ備エヲ立テ昼夜奔走シテ鹿児島ニ入ル」。

結局、西郷たちに追いつけなかつた碓井の部隊は九月七日に鹿児島島の西田村（鹿児島市西田、現在は市街の中央部で、鹿児島中央駅の北側、城山の南西）に到着し、ここで九月二四日の総攻撃まで警備をつづけた。到着時には、すでに米倉を巡る戦闘は終わっており、西郷たちは城山に立て籠もっていた。政府軍は続々鹿児島に集結し、城山の周囲に堡壘、柵、鹿柴（さかもぎ）を設けて防衛線を張り巡らして、西郷たちを包囲した。夜間になると互いに篝火をたいて警戒をしている様子が日記に記されている。九月二一日の記事に、「毎夜城ニ火ヲ放チ士族ノ家屋ヲ焼テ之ヲ箒リトシ、賊兵城山ニ在テ官軍ノ襲ヒ来ラントスルノ口々壘ヲ築キ、夜間塚外ニ於テ大箒ヲ焚キ之ヲ堅ク守ル、官兵ハ周圍ノ防禦線へ諸隊銘々ノ持場ヲ定メ、夜ニ入レハ大箒ヲ焚キ之ヲ守ル事益嚴重ナリ」とある。焼け残つた鹿児島士族の屋敷もこの時に燃やされてしまったものがあつた。

碓井は城山攻撃に参加しなかつた。彼の日記によると、各隊とも攻撃隊たることを主張し、結局各隊から「強兵而已ヲ撰ミ以テ城攻ノ兵」としたとある。攻撃前日の二三日午後四時から、各隊の宿舎で酒宴が始まり、隊長は攻撃に当たる兵と守備に当たる兵の双方に檄を飛ばした。攻撃部隊は深夜一二時に整列して移動を開始、翌日午前四時の大砲の合図とともに攻撃に移り、午前八時頃に戦闘は終わった。翌日夕刻、碓井たちは西田村の宿舎に帰り、この日から二日間にわたって「酒宴」を開いた。

この後、二八日には鹿児島港より豊島丸に乗船して帰路に就き、三〇日神戸に上陸した。その後、一〇月一日から一三日までの間は、神戸、大阪、京都の各地を見学した。半年以上にわたる、絶え間ない戦闘に対するご褒美の

骨休めである。

一〇月一四日、大徳寺前に整列した一〇〇〇人余の兵士は、徒歩で東京に向かった。東海道を進み、桑名・熱田間を和船で渡ったのを除くと歩き通しであった。一〇月二八日午前八時、神奈川に到着、ここからは汽車に乗り、聯隊宿舎に到着したのは同日午後四時であった。「午后一時三十分東京新橋停車場ニ達シ、之ヨリ隊伍ヲ整ヒ喇叭ヲ奏シ、聯隊行軍ニテ午後四時頃麻布宮所ニ帰着」と記している。碓井の日記は、解隊命令と故郷への帰還をつぎの様に書いて終わる。「十一月一日ニ至リ解隊ノ命令アリ、依テ二日ニ至リ麻布宮所ヲ発シ、全月七日郷里ニ帰宅致シ、此時両親ハ申ニ及ハズ兄弟親共大ニ喜祝ヲナシタリ矣 鹿児島西討日記大尾」

碓井の日記は薩摩軍や党薩隊を「賊」「賊軍」「賊兵」などと称しているが、必ずしも相容れない仇敵という印象は薄い。「賊兵」の勇敢さに感心しているところがあるし、反対に政府軍の指揮官が無理な命令を出して攻撃が失敗したこと、臆病な軍曹のこと、薩摩軍の攻勢で政府軍が敗北することなどを、率直に淡々と記しているという印象が強い。激しい戦闘の中での残酷な行為（例えば捕虜の敵兵を「弄殺」するなど）も描かれている。

六月以降の暑い最中の、熊本・宮崎県境地帯の急峻な山地の戦闘は読んでいても息が切れそうで大変そうである。そして日記には何処に行っても、ライフル銃の狙撃を避けるために、堡塁を構築している記事がある。兵士の仕事の大半が山登りと土木工事であったことがわかる。

二〇一〇年三月下旬、科研による調査の一環として、熊本鎮台と野村忍助指揮下の薩摩軍奇兵隊が戦闘をつづけた大分県南部の重岡を、大分県教育委員会の高橋武信氏の案内で現地調査した。その時、佐伯市宇目重岡の赤松峠周辺の道のない尾根筋で、政府軍と薩摩軍双方が構築した堡塁の遺構を見学した。細い山道の上の尾根筋に、向きが正反対の両軍の構築した大小の堡塁が無数に点在しているのに驚かされた。冷たい小雨降る中、落ち葉の堆積し

た尾根筋を、慣れない者が調査したので、案内者の高橋氏以外の参加者から転倒者が続出したのが印象に残っている。

碓井ははじめて体験する九州の地を興味深く観察し、戦鬪の合間には暇を見つけて盛んに地域を見て回り、その見聞を日記に記している。例えば、熊本県中部の原ノ丁（熊本県下益城郡美里町原町）に滞在中、養蚕をおこなう農家の様子を見て、その技術が東国と比べて遅れていることを記している。彼自身が養蚕の経験があるか、または養蚕の様子を見聞きして知っていた可能性が高い。

また、熊本から鏡山を越えて日向に入り、碓井たちが滞在した押方村・三田井（ともに現在の宮崎県西臼杵郡高千穂町）は、記紀神話の高天原や天孫降臨神話の舞台とされている地域で、各地にイザナミ・イザナギ二神、あるいはアマテラスの隠った天の岩戸、ニニギノミコトの降った高千穂峰、さらには地域の神である神武の兄弟のミケイリヌノミコトと鬼八（キハチ）の遺跡と称するものが点在している。いずれも江戸時代の国学者達が記紀の記述をもとに比定したものである。碓井も熱心に漏らさず、名所旧跡を訪ねたが、一方で合理的な観点から神主の迷信を批判し、例えば神主が進入すれば死ぬと警告した天の岩戸を、後の崖を下って実見したりしている。

酒に関する記述も印象に残った。大島大隊長や熊本県知事から、熊本解放とその後の戦鬪が一段落した四月下旬に、慰労として酒肴を与えられている。興味深いのは、大規模な戦鬪の前には部隊単位で酒宴を開き、隊長の檄を聞いて出陣していることである。酒に弱い筆者には、酒に酔った状態で戦鬪できるかと聊か心配であるが、前記の喜多平四郎の『征西従軍日誌』にも同様の記述（警視庁の巡查隊が熊本城に籠城するため、船を下りて熊本城に急行する際に、樽酒を開き、冷や酒をあおり、中には泥酔する者が出る話）があるので、当時は酒を飲んで戦鬪にはいるのは一般的であったのかもしれない。

〔付記〕

碓井福太郎『鹿兒島征討日記』は二〇一〇年度前期の専修大学大学院文学研究科の演習の教材として使用し、本稿の一部分の解説を磯辺国良、益満隆行の両氏に援助していただいた。友田昌宏氏（中央大学文学部講師）には全般を校閲していただき、多くの指摘を給わった。矢野建一氏（専修大学文学部教授）からは記紀神話についてご教示をいただき、一部を校閲していただいた。皆様に深くお礼を申し上げます。

本稿は科学研究費補助金・基盤研究（B）「西南戦争に関する記録の実態調査とその分析・活用についての研究（課題番号21320126）」による成果の一部である。

(i) 圭室諦成 一九〇二年熊本県生まれ。鹿本中学卒業後、鹿本郡八幡村（現在山鹿市）曹洞宗日輪寺の養子となり、福井県永平寺（曹洞宗）で僧侶修行。しかし、「道元精神が生きていないことに失望すると同時に、進学の初志やみがたく、ついに山を下りて上京」、東洋大学を経て東京帝国大学文学部国史学科卒業、史料編纂所と駒沢大学に勤務した。辻善之助教授の教えを受け、社会経済史を背景に日本仏教史を研究した。予備役歩兵少尉のため三度召集される。うち二度は即日解除、三度目は小隊長として長崎県壱岐の警備に就き、家族は熊本県山鹿市日輪寺に疎開する。戦後は熊本県社会教育委員（のち委員長）として郷土の歴史研究と資料保存に勉め、一九五〇年に熊本女子大赴任と共に、西南戦争と西郷隆盛について研究を進めた。一九六〇年に上京して明治大学の教授となったが、一九六六年死去。著作に『道元』『日本仏教論』『西南戦争』『西郷隆盛』『葬式仏教』『横井小楠』（遺稿）など『圭室諦成先生年譜・著作目録』（駿台史学）二〇号）。

(ii) 川崎三郎については、拙稿「川崎三郎小論」（大阪大学文学部日本史研究室編『近世近代の地域と権力』清文堂、一九九八年所収）を参照。

(iii) 亀岡は筆まめな陸軍軍人で、軍事関係の著書を何冊も著している。日清戦争従軍日誌として『日清戦袍誌』（偕行社、一九三三）があり、これも将校の日清戦争従軍日記としては珍しい貴重なものである。青潮社は亀岡の西南戦争従軍日誌を『第三旅団西南戦袍誌』と題して、一九九六年に復刻した。

鹿兒島征討日記

碓井 福太郎

〔序文〕

鹿兒島征討日記序

此書ハ明治十年第二月中旬鹿兒島県私学校ノ生徒等二万余人、西郷隆盛、桐野利秋、篠原国幹等ヲ主謀ニ仰キ肥後表ヘ乱入シ、熊本鎮台ヲ始メ諸鎮台ヲ騷擾シ一挙輦下ニ出ントス、朝廷ニハ後備軍ニ列スルヲ以テ召集ノ令ヲ下サレ、三月上旬郷里ヲ発シ、全月中旬肥後国田原坂ニ至リ始メテ接戦、夫ヨリ所々ニ於テ交戦シ、全年九月下旬ニ至リ鹿兒島城山ニ於テ賊徒殲滅シタル事情ノ概略ヲ記載ス

尤開戦ヨリ三月十九日迄ノ事ハ雜報ヲ集メテ記載ナセシ故、我ノ眼前ニ為セシ事ニハ非ス、此書中ニハ心覺ノ事ナレバ謬文誤筆ナキヲ欲セス

〔本文〕

鹿兒島征討日記

(一六丁までの、新聞等の雑報の情報により西南戦争開戦から三月十九日迄を再構成した部分を略す)

扱雑報止テ次紙ハ我日記ニ移ル、今般西国騷擾ニ付突然トシテ後備軍召集ノ令ヲ下サレ、三月一日、郷里ヲ発シ、全四日、東京麻布宮所ニ至ル、鎮西出張ノ命アリ

全十日〔雨天〕午前第九時麻布宮所ヲ出發シ、全十一時三十分新橋停車場ヨリ蒸気車ニテ発シ、全十二日(時カ)三十分横濱ニ到着シ、全所芝居小屋ニ於テ午食シ、午後三時全所ノ港ヨリ飛脚船東京丸、此船広大ニシテ中ハ七階長サ九十五間有、乗込ミ午后七時全所ヲ出帆シ

十一日〔晴天〕海上十二日

十二日〔晴天〕午后四時攝州神戸へ入港、直ニ上陸シ兵后四時再ヒ東京丸ニ乗込ミ

十三日〔雨天〕午前第四時全港出帆シ

十四日〔晴天〕午前第四時長州下野関ニテ暫時止船シ、全六時全所ヲ出帆シ筑前博多ニ入港、式時ニ上陸一伯ス十五日 午後十時整列、総督奉送トシテ直ニ出軍ノ処、変報休止トナリ、全十二時全所ヲ出軍シ〔三時過筑後地ニ入〕午後七時松崎駅ニ着陳一伯〔博多ヨリ八里〕

十六日〔晴天〕午前四時松崎ヲ出軍シ、午後二時頃羽大塚ニテ昼食シ、同五時三十分原ノ町へ着軍一泊ス〔松崎ヨリ十里余〕

十七日〔晴天〕午後四時原ノ丁ヲ出軍シ〔拙足病ニテ逗留ス〕、松ノ下ニテ昼食シ〔一時頃肥後ノ地ニ入ル〕、南ノ関ヲ経テ午後五時高瀬駅ニ着陳一泊ス〔原ノ丁ヨリ七里余〕

十八日〔晴天〕逗留、之ヨリ戦地ニテ当駅等半ハ焼跡ナリ

十九日〔晴天〕午後六時高瀬ヲ出軍シ、午後二時木ノ葉駅ニ着軍、暫時休憩〔此日拙原ノ丁ヲ発シ南ノ関、高瀬ヲ経テ、午後四時木ノ葉ニ着シテ本隊ニ入ル、時ニ一統へ酒肴金一円ヲ賜フ、田原坂ノ砲声遙ニ聞へ、其裂シキコト恰モ豆ヲ入ルカ如シ〕全六時頃ヨリ雨降り、全夜十二時木ノ葉駅ヲ出軍シ、全二時本陣ニ整列、此時雨降ルコト甚シ、闇夜ニシテ咫尺ヲ弁セス、既ニ二侯、田原坂両所ノ間、道險阻泥濘ニシテ歩行甚タ苦シム、暫時ニシテ二侯戦場ニ至リ、我隊〔第一聯隊第一大隊ナリ、尤一中隊、二中隊ハ木ノ葉ニアリテ未タ進マズ、三中隊、四中隊ノミナリ〕指揮長ヲ分、黎明大進撃〔時ニ雨止ム、遙カニ右吉次越へ、遙カニ左山鹿口等ハ追撃アルトモ、遠隔故委細不詳也〕、此時右小隊ハ内藤中尉、左中隊ハ斎藤大尉、河村少尉、最モ中軍ヲ備へ、然ル所内藤中尉勢盛ニシテ独リ田原坂三ノ台場へ先軍シ、喇叭ノ合図ニテ銃鎗ヲ以テ躍リ入り、二ノ台場ヲ乘リ取り戦將ニ酣ナリ、二侯ノ賊軍潰走ス、尋テ田原坂一ノ台ヲ陥擄シ、此時右小隊指揮長内藤中尉ヲ始メ即死数十名、負傷又甚多シ、二侯、田原坂、山鹿口、此三ヶ所ハ諸山連綿ス、然レ雖山鹿口ハ遙カ左当リ、右田原坂、二侯両所ノ破ル、ヤ否ヤ、山鹿ノ賊軍忽然トシテ潰走ス、此時賊ノ屍ハ積テ山ノ如ク〔去ル大戦四日ヨリ七合猶抜クコト能ハス、両陣ノ間巨離僅ニシテ毎戦ノ死骸互ニ引コト能ハズ故ニ猶夥シ、古語ニ云ウ加藤清正熊本城ヲ築キシトキ、田原坂ハ熊本城ノ喉ニテ、五百ノ兵ヲ以テ五万ノ兵ヲ防クコト、三年猶易ト云フ〕、大砲小銃刀鎗長刀ノ類山野ニ棄靡スル者数千挺、是ヨリ〔野

津少將⁽¹²⁾ノ指揮ニテ齋藤大尉ノ命ヲ受ケ一小隊ニテ植木駅・山鹿ノ間道ヲ防ギタリ」二俟ヲ破リシ官軍植木ヲ過キ向
 地(向坂カ)へ(田原坂ヨリ二里)進軍ス、賊軍道路ノ兩端ニ伏兵設ケ、官軍ノ進入ヲ待テ兩端ノ伏兵齊シク起リ、
 正面側三方ヨリ乱射シ彈丸大雨ノ如シ、之ガ為甚タ苦戦、賊兵勝ニ乘シテ追撃ス、再ヒ田原坂へ押モトサント猶モ
 敵シク撃チ来リ、官兵植木駅マテ退キ茲ニ防ク(向坂ヨリ植木マテ十丁程アリ、官軍此間ノ苦戦ニ即死百十三名ヲ
 残セリ、后ヲ見レハ賊軍之ヲアツメテ一穴ニ埋メ、官軍死骸何人ナル標札ヲ立テタリ)、田原坂ヲ破リシ官軍植木
 口左へ進入シ、山鹿ノ敗賊ト大ニ戦フ、夜ニ入りテ官軍植木丁へ火ヲ懸ケ、諸々篝火ヲ取り前軍中ノ備ヲ設ク(此時
 拙山鹿ノ間道ヲ引キアケテ本隊ニ入ル)、全夜一時頃ヨリ雨降ルコト甚シ、此時賊ノ抜刀隊二百人斗リ突然我が軍
 へ乱入ス、官兵手早ク銃鎗ヲ取テ之ニ当ル、賊兵屈シテ退却ス(四時頃ニ至リテ雨止ム)、黎明ニ至ルカ否ヤ台場
 ヲ築キ警備ヲ加へ

二十一日(雨天)午後二時頃熊本街道ヨリ二千人斗リノ軍勢、列ヲ組ミ悠々然トシテ進ミ来リ、我兵ヲ鑿ニセント
 撃チ来ル、彈丸透間ナク我兵防クコト熊ハズシテ捨丁程退キ、地形ヲ撰ヒ茲ニ防ント台場ヲ築ク、土俵ナク持チ来
 ル飯俵ヲ楯トナシ(此台場高二丈五尺横三十間余)打来ル敵ヲ的トナシ死力ヲ尽シテ戦フニ、賊兵茲ヲ破リテ田原
 坂□ント猶モ敵シク攻来リ、其砲声恰モ大雷ノ頭上ニ落ルガ如シ

二十二日(雨天)午前五時頃(時ニ雨止ム迄ノ)劇戦ニテ官軍少シク進ミ、午後五時頃迄ノ戦、此ニ於テ官軍兩軍
 トモ堡壘ノ防禦線七里ニ跨ル、其地名ハ遙ニ右、吉次越ヨリ木留⁽¹⁶⁾、植木、尾野村⁽¹⁷⁾、石川⁽¹⁸⁾、島ノ巢⁽¹⁹⁾、隈府ニテ、七里
 ノ連陳最モ重ニシテ、互ニ敵陳ノ様子探ラントスルニ一人モ忍ビ窺フ透間ナシ、同夜一時頃ヨリ雨降ル

二十三日(雨天)午前五時三十分ヨリ軍曹一人、伍長二人、兵卒八人、探偵トシテ線外へ進歩セシ所、賊兵頗ル砲
 丸三直ニ帰陳シ(拙此ノ時軍曹宮野、伍長上ノ山、兵士十一名ニテ遙カ左ノ村中ヲ探偵セシニ、軍曹宮野恐怖シテ

敢テ進マズ、故ニ悠々ト村中ニ休息、午后二時頃帰陣シ本隊ニ入ル、軍曹宮野后チ木山ノ戦ヒニ右足ヲ射レテ病院ニ入ル、伍長上ノ山ハ後チ軍曹ニ進ミ無事ニテ凱旋セリ」指揮長迫田小佐ニ報ス、直様迫田ノ命ヲ以テ進ミ大ニ戦ヒ頗ル分捕〔賊軍第六大隊ノ米四十俵銃器数百挺、人夫不在故火焼ス〕、交戦僅カ日暮ニ及フ、本線ニ引アゲ野陣ス

廿四日〔晴天〕我ガ三中隊第一ノ台場ヘ伍長一人、兵士十八名増加ス〔此時大垣伍長即死ス〕、是ヨリ数々戦ヲ挑ム、此ノ地形ハ田ナク畑ノミ、総テ凸凹ノ地ニテ二三町ノ間ニ一丈二丈ノ高低ナキハナシ、道窪ク畑高ク、道歩ムニ一二丁ヲ隔テ人頭見ヘス、両陣ノ間近キハ拾間、遠ハ二百間ヨリ三百間アリ、互ニ塁ヲ堅固ニシ、或ハ空堀ヲ鑿リ、或ハ鹿柴〔木ノ枝或ハ竹ノ釘ヲ地ニサシテ人馬ノ歩ミカタキヲ主トス〕ヲ樹ヘ、攻メ来ラバ壘ニセント軍術ヲ百方ニ廻ラシ軍機ヲ時宜ニ任セテ、専ラ防禦ノ備ヲ設ケ透間ヲ目ガケテ狙撃ヲナシ、敢テ大兵ヲ出サス、然レ雖連陳數里ニ跨リ大小ノ銃砲数万ナル故ニ、瞬間ト雖モ昼夜砲止事ナク、植木口ハ熊本ヘノ本街道ナレトモ、連隊ノ中央ナルカ故ニ進撃ナン難シト雖モ、熊本鎮台兵ハ薩兵ニ囲マレ籠城シ后一時モ早く熊本城ノ通路ヲ撃開カント、木留、鳥ノ巢等ノ口々ハ日々大兵ヲ引テ攻撃スレトモ賊塁堅固ニシテ拔ケス、木留、石川、鳥ノ巢等ノ戦ヒハ遠隔故委細ハ不明ナリト雖モ官軍ノ死傷多シト知ル、而シ植木、尾野村等ハ敢テ交野戦ナシ、只狙撃ノミト雖モ一中隊毎ニ日々一人二人ノ死傷ハアリ、日々休憩ハ士卒ノ差別ナク、時ニ見張ノ交代ヲナシテ休睡ス、然レ雖モ大雨ノ節ハ雨池シテ野中ノ如シ

二十五日〔晴天〕

二十六日〔晴天〕

二十七日〔晴天〕

二十八日〔雨天〕

二十九〔雨天〕

三十日〔雨天〕

四月一日〔雨天〕

二日〔晴天〕

三日〔雨天〕 此日神武天皇祭奠ニ付一統へ酒肴ヲ賜ウ

四日〔雨止ム全シ夜中降ル〕

五日〔雨天〕 全夜間十時頃賊ノ拔刀遂(ツ)(隊カ) 百人斗リ、竊カニ我カ持場ニ襲ヒ来リ不意ニ踊リ入り、人数ヲ整ヒ

五十人余リ銃鎗ヲ以テ之ニ当リ、互ニ暴虎ノ勢ヲナシ、戦ヒ当ニ酣ニシテ勝敗決セス黎明ニ至ル、時ニ我カ援兵一

小隊賊ノ側面ヨリ銃鎗ヲ以テ突入ナセハ、流石ノ薩兵留メ兼テ本線へ引アケント機械ヲ棄テ散乱ナス、官軍素ヨリ

台場ノ外へ鹿柴ヲ備へ或ハ空堀ヲ鑿リ兼テ防禦ノ備アリ、敗卒之ニ陥リ討死者十八人ノ出候頃ニ至リテ本備トナリ

六日〔晴天〕 午前八時第三大隊ノ台場へ転シ、此時第一ノ台場ハ軍曹一人、伍長二人、兵士拾二人ニテ請テ持ス

七日〔晴天此時一ツ木村緑丁⁽²³⁾辺ヲ散歩シ、午前八時頃岩ノ山ニ登リ望遠鏡ヲ以テ熊本方ヲ見シニ、城兵植木口押シ

出ント一里程進ミ、竹部村ニ大戦アリ〕

八日〔雨天〕

九日〔晴天〕 全夜風雨烈シク

十日風雨止ム

十一日〔晴天〕 午後二時我カ三中隊鬼塚⁽²⁴⁾へ転シ、壘ヲ築ク事六ヶ所、一ヶ所へ軍曹一人、伍長二人、兵士十二人ニ

テ請持ス、尤モ鬼塚ニテ士官二人、軍曹三人、伍長一人、兵士二十五人ナリ

十二日〔晴天〕

十三日〔晴天〕

十四日〔曇り〕 全夜雨降ル

十五日〔晴天〕 午前五時ヨリ午後四時マテ休憩ス当リ、午前八時ヨリ戰友古屋房吉ト二人ニテ散歩シ、岩野山ニ登リ官賊マヤ兩陳ヲ遠見スル時、午後二時頃鳥ノ巢ノ方ニ当リ賊陳ト覚シヤ所ヨリ火ノ手アカリ、之ヲ見テ曰ク賊謀事ヲナシテ我軍撃ントスルニ異ナラス杯ト云ヒ、顧見スルウチ間近ク火ノ手アカリ、何事ナラント直ニ帰陳ス、時ニ山鹿口ノ官軍ヨリ報知アリ、賊兵突然トシテ引揚シ、故直ニ熊本城へ押寄セント、賊ノ巢窟ニ火放チ連陳ノ俣喇叭ヲ鳴ラシ喊声ヲアケテ田畑道路ノ差別ナク一時二城下押寄タリ、同四時頃熊本城下出町ニ至リ城兵ニ逢フ、城兵ノ喜ヒ大方ナラス、我大隊〔第一聯隊第一大隊ハ〕日ニ及テ四方寄村へ引アケテ野陳ス、四方寄村ハ植木熊本ノ中央ナリ、賊兵突然ト引揚タル次第ヲ後チ聞知スルハ、去ル四日八代口ノ官軍ニ大隊増加シ、大ニ戦ヒ八代口ヲ破リ、尋テ諸口ノ賊兵背後ノ襲来ヲ憂テ日向地ヲ指シテ引揚タリト云フ、之ヨリ官軍総督本營ヲ熊本ヘ立ツ

十六日〔晴甚タ大熱〕 本街道ヨリ植木ヘ引アゲ時ニ變報アリ、改喜村ノ内前原ニ至リ舍營ス、田舎ノ農家ニテ諸品モナク舍營ト雖モ唯家内ニ入ルノミ、全夜雨降ル

十七日〔曇り〕

十八日〔晴天〕 逗留

十九日〔晴天〕 午前六時、改喜村ヲ出シ竹迫村ニ至ル、午后士官一人、軍曹一名、伍長一名、兵士一名四名ニテ御立山、二分村ヲ經テ鉄砲小路村マテ斥候、全五時頃古閑村ニ帰陳シ墨ヲ築キ大哨兵ヲ設ケ、半夜交代ニシテ半夜家

内ニ休憩ス

二十日〔晴天〕午前六時古閑村ヨリ大隊ヲ散兵ニナシテ、鉄砲小路ヲ經テ枯木駅⁽³²⁾ヲ過キ大堀木村⁽³³⁾ヘ進マントスルニ、遙カニ隔テ畑ノ小高キ所ヘ賊兵二百斗リニテ台場ヲ構ヒ我軍ノ龍^(マヤ)（襲カ）来ヲ待ツ、我大隊ノ指揮長大鳥少佐^(マヤ)令ヲ下シテ曰ク、僅カノ殘賊攻ムルニ足ラン、銃鎗ヲ以テ芋ザシニ致セ、砲スルコト勿レト、台場ヲ指シテ押寄ルニ、側面ノ屋影ヨリ我カ左翼ヘ四五砲連發、一人傷シニ齊シク進ム、左翼ハ二三丁退キ其ノ屋ヘ火ヲ放チ一村焼払シ又齊シク進ム、賊官兵ノ砲ナキニ驚キ唯々望見スルノミ、而シテ巨萬僅カニ近クヤ否ヤ賊一發ス、我兵之ニ応ジテ連發シ暫ク連戦スル内、我隊ヨリ三人〔頗ル強兵ヲ撰ミ〕斥候トシテ遙カニ右方ヲ廻リ大堀木村ニ入り、村内ヲ探偵スルウチ思ハス敵ノ背後ニ出テ互ニ驚ク、我斥候退歩セハ追撃アラント恐れ菜種ノ■畑中ニ潜ミ、賊モ周章狼狽シテ去リ、我カ大堀木村下ノ菜種ノ中ニ潜ミ我軍ノ至ルヲ待ツ、我カ中隊ノ一半隊七人ニテ大堀木村ニ入り探偵シアル家ノ玄関ヨリ眼下ニ見ル処、賊菜種畑ノ畔口土手ニ伏シ居タリ、其玄関ヨリ七人ニテ齊シク砲發シ、賊兵頭上ノ亂射防クヘキ策ナクシテ一町程退キ小丘ニ伏ス、後チ聞スレハ此時賊ノ大隊長負傷シ外内七人即死七人アリト云ウ、日暮ニ及テ官軍引アケテ枯木ニ至リ、防禦ヲ定テ之ヲ守ル、此日ニ番中隊ハ我カ左翼ヲ進ミシニ処、敵遠シト伍長一人、兵士四人斥候トシテ鶴村ヲ經テ川窪村⁽³⁵⁾ヲ過キ、白川ニ渡ラントスル処、賊屋影ヨリ二百人斗リ銃口ヲ揃テ連發スルニ遇ヒ、一度ニ三人倒レ二人漸ク遁テ帰陣^(マヤ)セリ

廿一日〔晴天〕黎明枯木ヲ出軍シ大堀木村ニ至リ、土民ニ賊ノ様子ヲ問ウニ、昨日ノ戦ニ当村ノ雞リ巢ニ入ヲ失ヒ皆林中或ハ柴牆等ニ伏シ居タル処、全夜十二時頃賊ニ追レテ雞八方ニ羽翔ス、賊兵其羽音ヲ聞テ官軍夜襲ヲ謀リ大兵押し来リ、故ニ今鳥驚起シタルニ心定ナリト皆周章シ先ヲ争ウテ木山⁽³⁶⁾、川原⁽³⁷⁾等ヲ指シテ引揚タルト云ウ、官軍直ニ斥候隊ヲ出シテ、続テ本隊モ大堀木村ヲ出軍シ、白川ヲ渡リ曲手村ヲ過キ道明村⁽³⁸⁾ニ至リ昼食ス、我隊第四中隊

ハ大坂鎮台一小隊ト全進ス、曲手村ヨリ左へ折レテ河原町へ進軍ス、全二時道明村ヲ出軍ス、此時官兵ハ大堀木村ノ賊兵□敗シタルニ乗シ勢ヒ暴虎ノ如シ、迫田少佐騎シテ先鋒ス、全三時頃木山町ニ入ラントスルニ賊ノ哨兵迫田ヲ目的ニ砲発ス、中タラス、我軍直ニ散兵トナシ其哨兵退クト共ニ木山町ニ押シ寄ル、賊ノ哨兵本隊へ報知スルノ隙ナク故ニ官軍ノ近クヲ知ラス、官軍ノ先鋒〔第一聯隊ノ第三大隊〕木山町ニ至レハ賊兵周章シテ之ヲ防ク、官兵頗フル大小銃砲ヲ発シ、少シク後レシ官軍モ此砲声ヲ聞キ、最早先鋒ハ接戦ニ及タリ一時モ早く応セント、喇叭ヲ鳴シ整々隊伍ヲナシ喊声アケテ馳來リ、我カ援兵追々増加シ官軍ノ銳氣益々盛ナリ、薩兵善ク防ケトモ大軍不意ニ出タルヲ以テ軍備不合シテ賊兵弛ム、留アルナレトモ兩軍ノ彈丸雨ノ如シ、我強兵五人テ其ノ中へ躍リ入り家屋へ火ヲ放チ、時ニ北風起リ烟煙賊軍ヲ掩ウ、流石ノ薩兵止マリ兼テ散々ニ敗走ナス、官兵ノ追擊甚タ急ニテ傷者ヲ背負テ逃ルヲ後ヨリ銃撃ス〔此時賊ノ死数十名、軍曹二人、傷五人アリタリ〕、木山ヨリ十町程隔テ、高土手ノ下ニ戸數三十軒斗リ寺中村アリ、茲ニ矢部³⁹へ越サントスル賊兵千人斗リ寺中村アリ、茲ニ休足シ木山ノ砲声ヲ遙カニ熊本ノ方ニ戦ヒアル杯ト云ウ、悠々ト飲食ナシテ居タル処、我大隊一中隊ハ木山ノ側面ヲ襲ハント遙カニ左方へ軍ヲ進メシ処、寺中村ニ出テ其賊兵ヲ見テ一時ニ撃チ卸⁴⁰ス、大小ノ彈丸大雨ノ如ク、薩兵狼狽シ銃機ヲ棄テ木山川ヲ渡リ敗走ス、茲ニ賊ノ死者十八人、傷者ノ生捕三人、官軍ノ傷者一人ノミ、分捕物大砲一門、小銃三百挺、外二軍用ノ雜品數知レス、日暮ニ及テ木山寺中ヲ引揚テ野陳ス、扱第四中隊ハ大坂鎮台兵一小隊ト曲手村ヨリ左へ折レテ午後三時頃河原ニ至リ、茲ニ大津⁴¹ヨリ矢部へ越サントスル薩兵止リ暫時休憩スルニ哨兵ヲ配ラントスル処、我ガ軍固ヨリ河原ニ賊兵アルヲ知り直ニ散兵トナシ河原丁へ突入為バ、賊兵周章シ機械ヲ棄テ後ロノ山へ逃ケ登ル、軍勢千人斗リ山上ヨリ顧テ我カ三百人ニ過ギザルノ小勢ナルヲ悟リ、直ニ散兵トナシ我カ軍ヲ取巻キ八方ヲ打來リ、我兵進退スルコト能ハス、死力ヲ尽シテ茲ニ專度ト闘ウ内、日暮ニ及テ漸ク一方ヲ破リテ五六町ヲ退キ〔此時官兵弄殺

セラル、者アリ、死傷スル者二十人ニ下ラズ、賊兵所傷數十人アリト云フ、^(マ)円陳トナシ喇叭ヲ鳴ラシ大車追撃ノ直傷ヲナシ居タルニ、賊兵敢テ襲来ラス

廿二日〔晴天〕早天河原ニ至リ人民ニ賊ノ様子ヲ問ニ、昨官軍河原ヲ去ルヤ否ヤ直様賊ノ空^(マ)陳ヲ搜カスニ、小銃三百拾弍挺、米三百弍拾俵、軍用ノ雜具数千品アリ、運ハントスルニ人夫不足故、直ニ其地之人馬ヲ雇頃其機械諸品ヲ運送シテ、午後四時頃木山町ニ至リ各所ニ舍營ス、時ニ木山ヲ破リシ官軍野陳^(マ)ヲ引アケ木山或ハ寺中村ニカエリ、各所ニ舍營シ〔拙此時寺中寺妻名方ヲハ方々舍營ス、以来家名ヲサシテ舍營トアルハ第二中隊ノ第一小隊ヲ云、拙一半隊ニ列スルヲ以テナリ〕、木山川ヲ防禦線ト定ム、隊ノ現員ヲ三分シテ其一ヲ以テ防禦線ノ大哨兵トナシ、二分ヲ以テ時々交代ヲナシ

廿三日〔雨天〕甚タ暖シ

廿四日〔雨天〕

廿五日〔曇リ〕

廿六日

廿七日〔雨天〕此日大隊長大鳥^(マ)少佐ヨリ酒肴ヲ賜フ、茲ニ数々^(マ)面問連日ノ劇戦モ今ニ至ル迄十回奮発勉強致ス未タ一ツノ敗績^(マ)（績カ）モナク勝利ヲ得、当隊ノ名誉墜サ、ル義ハ、全ク各將校下士ハ勿論、兵卒ニ至ル迄一同奮発勉強致ス処、小官ニ於テ感喜ニ堪ス、就テハ神戸港ニ於テ求メ置候鹿酒^(マ)聊慰勞トシテ差廻シ候間、一統へ御配分御聞味有之候ハ、幸甚ト

廿八日〔晴天〕此日酒肴渡ル

廿九日〔晴天〕此日熊本県知事ヨリ慰勞トシテ酒肴ヲ送レリ

五月一日〔晴天〕

二日〔晴天〕拙此日伍長兵五人ニテ平田村ヲ散歩スル、折シモ有ル家ノ人我等ヲ見テ云フニ、見苦シキ宅ナレ雖暫時休足アルヘシト述ルニヨリ其家ニ立寄シ処、其人忝シク今般鎮西ノ一札ヲ述べ、拙者モ年近ク隊ニ従事シ、方今ニモ召集ノ御沙汰之有ルコトヲ待ツニ、未タ何ノ御沙汰モナシ、当村ニ薩兵ニ与シタル者アリ、植木等ノ戦ニ敗走シテ其俣婦村ナシ所々ニ潜ミ伏シ或ハ自宅ニ居ル者アリ、姓名斯ノ如シト名簿ヲ出シ捕縛至サン案内仕ラント云ウヨリ、直ニ其人ヲ村内探偵ナシ八人ヲ捕縛シ寺中村ニ帰舎シテ、其後チ本營ニ送ル

三日〔晴天〕当隊第四旅団ノ処、更ニ第一旅団ヘ編入、全夜雨降

四日〔雨天〕此日酒肴渡ル、全夜雷鳴アリ

五日〔晴天〕此日ヨリ地理見究ノタメ、熊本ヘ日々斥候ヲ出ス

六日〔晴天〕

七日〔晴天〕風吹ク

八日〔晴天〕風、午前十時ヨリ木山ヘ大哨兵ス

九日〔晴天〕正午寺中ニ帰舎ス

十日〔曇り〕酒肴渡ル、午前七時士官一名、軍曹一名、伍長二名、兵士十三名ニテ熊本ヘ〔三里アリ〕斥候トシテ寺中村ヲ発足シ、全九時頃沙取村ニ至リ美麗ノ築山并ニ泉水等ヲ見物ナシ、⁽⁴⁴⁾全十時頃熊本城下ニ至リ所々遊歩スルニ長六橋⁽⁴⁵⁾アリ、外ハ人家アリ内ハ皆焼跡也、城中ニ入り所々見学スルニ多ハ焼跡ニテ、唯三樓一ヶ所、病院、砲兵屯所、火薬庫等残レリ、其家屋ノ屋根ヲ見レバ砲丸ノ跡蜂巢ノ如シ、尤モ火薬庫ニ至ハ低キ所ニテ外方ヘ見ヘス、

故ニ丸跡ナク、又城ヲ出テ左ノ方ハ兵營仮普請アリ、其点呼〔点呼トハ時間ヲ定メ毎日喇叭ノ合図ニテ整列シ、隊長来リテ名簿ヲ以テ高声ニ姓名ヲ呼ビ名簿読ミ終リ、又其日ノ諸報告ヲ読ミ、終レハ喇叭ノ合図ニテ解散スルコト兵員常則ナリ〕最中ナリ、練兵場ヲ通過シ長六橋ヲ渡リ再ヒ町屋ニ至リ所々遊歩スル内、熊本鎮台兵ニ出逢ヒ籠城中ノ咄ヲ聞ニ、五六丁程離レ西ニ当リ花岡山アリ、薩兵此所へ大砲数門ヲ引アゲ城中ニ乱射ス、又城中ヨリ巨砲ヲ以テ賊陳ヲ射撃シ其砲声恰モ大雷ノ如ク、又城兵ハ城下焼跡へ地雷火ヲシカケ置キ堅ク城門ヲ鎖シテ賊兵ノ城へ逼ルヲ待ニ、賊花岡山ヨリ発セシ彈丸城下ニ落ち、之カ為ニ一ヶ所ノ彈丸地雷火ヲ発ル、賊兵之ヲ見テ其雷火アルヲ悟リ、囲ミ敢テ城ニ逼ラス扨ト彼是談語スル内午後四時頃ニ至ル、依テ城下ヲ発足、全五時頃竹部村ニ至リ清正公ノ社へ詣ス、尤モ本社ハ熊本城下ニアレトモ今般火災ニ付軫社ナシタル由、此時雨降ル、全七時頃寺中村ニ帰舎ス、
 全夜雨止ム

十一日〔晴天〕正午ヨリ控兵ニ当ル、午後当中隊長齋藤大尉第二旅団ノ第二聯隊ノ第一大隊第一中隊附申渡、全六時軫隊ス、又当隊へハ木下大尉附ク、全夜十時頃ヨリ雨降ル

十三日〔雨天〕木山引アケテ寺中村ニ帰舎ス、午后二時寺中ヲ出軍シ御船丁ヲ經テ〔此時道ノ泥濘スルコト開戦以來第一トス〕緑川ヲ越へ、同夜十時三十分堅志田丁へ〔木山ヨリ四里〕着シ、全所善林寺ニ入ル

十四日〔曇リ〕全夜雨降リ

十五日〔雨天〕

十六日〔雨天〕午後四時ヨリ伍長守家吟治郎、兵士小池太郎ト三人ニテ山崎村へ斥候、糸石村上⁽⁴⁸⁾下ヲ經テ有安村⁽⁴⁹⁾ヲ過キ片非田村ヲ通り、全夜十一時頃堅志田村善林寺ニ帰舎ス

十七日〔雨天〕

十八日〔晴天〕午後六時堅志田ヲ出軍シ、全夜九時頃原ノ丁⁵⁰へ〔堅志田ヨリ二里余〕着軍シ各所ニ舎營ス、三中隊ノ一半隊ハ新米屋齋藤賀平方ニ舎營ス

十九日〔晴天〕逗留〔此日於戰友山崎清八ト二人ニテ戲ニ哥ヲ作り、又近村ヲ遊歩スルニ少シク蚕スル家アリ、其ノ体裁ヲ見ルニ、東国ト異リ種紙ヲハナシテ未タ十日ニ過キス、又小虫ヲ丸キ平籠ニ入テ糊ヲモシカス、丸葉ヲ与ヘ皆食ハスシテ葉涸ニテアリ、総テ東ニ異ナルコト多ク言語等猶違ヒ、此時別動隊広島鎮台ノ兵ニ逢ヒ賊軍ノ様子ヲ聞クニ、當時賊ノ本營ハ人吉岨等ニ立タルヨシ〕

廿日〔晴天〕午前五時原ノ町ヲ出軍シ、藤木村⁵¹へ〔原ノ丁ヨリ一里余〕大哨兵ス

廿一日〔晴天〕午前八時藤木村ヲ出軍シ、全九時頃ニ大哨兵ヲ張ル

廿二日〔晴天〕午后一時哨兵詰所ヨリ人夫二人ヲ連レ黒谷村ヲ巡邏シ、雞廿二羽ヲ買ヒ直ニ詰所ニ歸リ

廿三日〔晴天〕午前八時山頂ノ哨兵ヲ引アケ、下福良村ニ至リ午食ヲ喫シ、全十一時全所ヲ出軍シ緑川ヲ筏ニテ渡リ、午后二時頃矢部ノ濱⁵⁴丁へ〔下福良ヨリ二里余、山谷多ク難道〕着軍シ茲ニ舎營スル処、俄ニ變報來リ全三時頃濱ノ町ヲ出軍廣石橋〔橋ノ高サ一丈長サ三十間余ニ一ツノ目鏡橋ナリ、橋ノ中ヲ通ルコト樋下ノ如ク其水ハ五合程モアリ、尤モ橋ヲ渡ルニハ其水見ヘズ橋両傍ニ數百小穴アリ、常ニハ其レニ栓アリ、栓ヲ抜クトキハ其穴ヨリ水ヲ吐クコト百足ノ足ノ如シト云フ〕ヲ渡リ、全四時頃下川井村⁵⁶へ捨里程距リ大哨兵ヲ張り、此所ノ地形ハ小丘多クシテ木ナク草アリ、最モ美景ニシテ總テ築山ノ如シ

廿五日〔晴天〕正交代シ⁵⁷下川井村ニ歸舎ス

廿六日〔晴天〕正午ヨリ再ヒ大哨兵ヲナス、午后八時兵衛隊と交代シ⁵⁸下川井村ニ歸ル、全九時下川井ヲ出軍シ、全十時白石村⁵⁷へ〔下川井ヨリ壱里〕着軍シ、管村路、緑川端へ大哨兵ヲ張ル、時三更ナリ

廿七日〔晴天〕午前十一時全所ノ哨兵ヲ引アゲ、行軍ナシテ午后六時頃馬見原町へ〔白原ヨリ六里余〕⁽⁵⁹⁾着シ各所ニ舎営ス

廿八日〔晴天〕午前五時馬見原ヲ出軍シ鏡山〔肥後ト日向ノ国境〕、男坂ヲ越ヘテ〔是ヨリ高千穂へ入ル〕、正午上押方村へ〔馬見原ヨリ五里余〕着軍シ各所ニ舎営ス、之ヨリ後チ糧食課ヨリ毎日酒肴渡ル

廿九日〔晴天〕豊後武田落城ノ報知アリ、正後ヨリ中隊本部ノ守衛ヲナス

三十日〔晴天〕

三十一日〔晴天〕正午ヨリ馬見原街道へ大哨兵ス、午后四時頃薄雨三十分止ム

(1) 福岡県小郡市松崎。福岡から松崎・府中・羽犬塚・原町の各宿を経由して肥後国南関に至る薩摩街道を確井たちは行軍した。

(2) 福岡県筑後市羽犬塚。

(3) 福岡県みやま市高田町原。

(4) 熊本県玉名郡南関町関町。

(5) 熊本県玉名市高瀬。菊池川と繁根木川との合流点にある古くからの港町で、西南戦争では政府軍の補給基地となった。

(6) 熊本県玉名郡玉東町木葉(コノハ)。

(7) 田原坂は現在の熊本県鹿本郡植木町豊岡にある。北方から熊本城に向かう際、大砲を通すには田原坂を通らねばならなかった。田原坂は人工的に掘り下げられており、屈折した坂の両側に崖が連なり、両側に堡壘・陣地を作られると、通行が困難になる要塞であった。

(8) 熊本県玉名郡玉東町二俣。

(9) 内藤延慈中尉、以下将校の氏名は『征西戦記稿』によって推定した。

(10) 斎藤時之大尉、確井の所属する第一聯隊第一大隊第三中隊長。

(11) 熊本県山鹿市山鹿。

- (12) 野津鎮雄、一八三五―一八八〇年、鹿兒島藩士、戊辰戦争に参加し、一八七二年陸軍少将、西南戦争の第一旅团长、西南戦争の戦功で陸軍中将に昇進したが、一八八〇年に急死した。野津道貫（一八四一―一九〇八年）は弟、西南戦争当時は大佐、第二旅団参謀長。
- (13) 熊本県鹿本郡植木町植木、藩政時代豊前街道と高瀬往還・大津町道の分岐点、中心部の広町に民権派私学植木学校があり、一八七六年末に政府・熊本県の圧力で廃校となった。翌年、地域の民権家は戸長征伐を指導し、西南戦争勃発とともに熊本協同隊を組織した。
- (14) 向坂は、熊本県鹿本郡植木町鐙田にある地名。田原坂、つづいて植木を占領した政府軍は、植木町南方の現在の国道三号線沿いの向坂まで進出したが、ここで薩摩軍の伏兵に攻撃され大打撃を受け植木駅まで退却した。薩摩側は植木を攻撃し、田原坂を回復しようと攻撃を繰り返したが、辛うじて政府軍は植木駅まで退却した。
- (15) 吉次峠とも言う。玉名郡伊倉から熊本に出る原倉村道が、三ツ岳から東北に連なる尾根を越える所にあり、玉東町と植木町の境界。西南戦争の激戦地で、篠原国幹戦死の地。
- (16) 熊本県鹿本郡植木町木留。
- (17) 「尾野」は小野村の誤り、熊本県鹿本郡植木町小野。
- (18) 熊本県鹿本郡植木町石川。
- (19) 表記の「鳥」は「鳥」の誤記、また「鳥ノ巢」は鳥栖村（トリノスムラ）の誤り。鳥栖村は一八七四年の合併により野々島村となり、現在の地名は熊本県合志市野々島。
- (20) 熊本県菊池市隈府。
- (21) 熊本県菊池郡益城町木山。
- (22) 迫田鐵五郎少佐。
- (23) 熊本県鹿本郡植木町一木（ヒトツギ）、「緑丁」は味取（ミトリ）の誤り、「岩ノ山」は植木町岩野の岩野山、標高二一七メートル、確井は休みに度々岩野山に登って展望している。
- (24) 熊本県鹿本郡植木町小野に鬼のいわや古墳がある。植木町荻迫にも鬼塚の地名があるが、岩野山周辺ということで、この「鬼塚」は植木町小野であると推定した。
- (25) 熊本市出町、熊本城の北側、薩摩街道（豊前街道）沿いの町。
- (26) 熊本市四方寄町（ヨモギマチ）。
- (27) 熊本県八代市、黒田清隆参軍の提唱で同市南部の日奈久（ヒナグ）に高嶋大佐の率いる官軍側の衝背軍が三月一九日上陸し八代を占領、南部から熊本城を包囲する薩摩軍を攻撃せんとした。

- (28) 「改喜村」は改寄村の誤り、現在の地名は熊本市改寄町(アラキマチ)字前原。
- (29) 熊本県合志市竹迫(タカバ)。
- (30) 熊本県菊池郡菊陽町原水に鉄砲小路の地名が残る。鉄砲小路とは江戸初期、熊本府周辺の用地に仕立てられた防衛的、屯田兵村的性格をもった村のことで、肥後入国時の細川藩主忠利によって寛永一二年(一六三五)から翌年にかけて作られた。他にも同時期、熊本市内の平山、花立、黒石、楡木、麻生田、兎谷、保田久保などに「新地鉄砲者」や「地筒」と呼ばれる農兵が仕立てられていた。
- (31) 熊本県合志市福原に上古閑、新古閑の字名がある。
- (32) 枯木駅とは、枯木新町(現在の熊本県菊池郡菊陽町原水字新町)のこと。枯木駅は熊本藩主細川忠利が寛永一六年(一六三九)豊後街道の宿場町として創設した。
- (33) 熊本県菊池郡菊陽町久保田に大堀木の地名がある。
- (34) 碓井による表記は「大鳥少佐」であるが、正しくは大島久直少佐である。
- (35) 熊本県菊池郡菊陽町久保田の白川北岸に、川久保の字名がある。
- (36) 熊本県上益城郡益城町木山。
- (37) 熊本県阿蘇郡西原村河原。
- (38) 熊本県菊池郡菊陽町曲手(マガテ)、川久保から白川を渡ると曲手で、曲手神社がある。なお曲手の南部に道明という字名があり、道明神社がある。
- (39) 熊本県上益城郡益城町寺中。
- (40) 熊本県上益城郡山都町浜町、現在の山都町役場の所在地はかつて浜町と言ったが、ここがかつての矢部村、矢部町の中心地である。熊本から御船を経て馬見原に抜け、日向延岡に至る日向往還の要衝。
- (41) 熊本県菊池郡大津町大津。
- (42) 麩は麩の略字体、粗酒の意味。
- (43) 熊本県上益城郡益城町平田。
- (44) 沙取の字名は現在ないが、砂取小学校が国道二八号線沿いにある。また水前寺公園(成趣園)も至近にある。
- (45) 白川に架かる橋、河原町と迎町を結ぶ長六橋は、加藤清正が熊本城および城下町の築造時に架設した慶長六年の二文字をとつて、長六橋と名づけられたといわれている。
- (46) 熊本県上益城郡御船町、御船は日向往還の要衝で、古くから上益城地方の政治・経済・文化の中心地。県下屈指の醸造の町、商都として知られ、また要害枢要の地で、南北朝の昔から西南戦争まで多くの戦闘がおこなわれた。

- (47) 熊本県下益城郡美里町堅志田。
- (48) 熊本県宇城市豊野町山崎および豊野町糸石。
- (49) 熊本県上益城郡甲佐町有安。
- (50) 熊本県下益城郡美里町原町。
- (51) 熊本県上益城郡山都町藤木。
- (52) 熊本県上益城郡山都町目丸に黒谷の字名がある。
- (53) 熊本県下益城郡美里町洞岳に下福良の字名がある。
- (54) 熊本県上益城郡山都町浜町、日向往還の中で馬見原と並ぶ主要都市。鎌倉時代には阿蘇大宮司が南郷から矢部に移り浜の館を建設（現在の山都町城平の矢部高校敷地）、三百年以上も阿蘇大宮司の本拠となった。元禄時代に町ができあがり、町中心部に高札場があり、商店が軒を連ねた。
- (55) 山都町には現在も多くの石造眼鏡橋が残るが、「廣石橋」の名前は見えない。読み間違いの可能性があるので、ご教示を賜りたい。
- (56) 熊本県上益城郡山都町下川井野。
- (57) 熊本県上益城郡山都町白藤に白石の字名あり。
- (58) 熊本県上益城郡山都町菅（スゲ）。
- (59) 熊本県上益城郡山都町馬見原。江戸時代、高千穂や椎葉に通じる日向往還の宿場町として栄えた交通の要衝。
- (60) 標高九一六メートル、現在も熊本県と宮崎県の県境。
- (61) 宮崎県西臼杵郡高千穂町押方。
- (62) 豊後竹田の誤り。